

氏名	堤 啓
学位の種類	医学博士
学位授与番号	乙 第 827 号
学位授与の日付	昭和52年3月31日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第5条第2項該当)
学位論文題目	スモンの臨床・病理学的研究
論文審査委員	教授 妹尾 左知丸 教授 長島 秀夫 教授 大藤 眞

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

1964年11月から1975年8月の約10年年間に岡山県下で剖検された Subacute myelo-optico-neuropathy (スモン) の30例について臨床及び病理所見を検索し、その原因について検討を加えた。

スモン30剖検例の年齢は33才～81才、平均59才で、男15例、女15例であった。

スモンとしての神経症状の持続期間は17日から7年7ヶ月であったが、大半は10ヶ月以内であった。大多数は前駆腹部症状につづいて、両側性に下肢末端から上行する知覚障害、次で運動障害を来し、更に17例が視覚障害を訴えていた。

全例に共通した形態学的変化は、脊髄後索と錐体側索路の対称性系統的な変性であった。変性は各神経路の末梢で最強で、近位に近づく程変化は軽減していた。

神経症状の発現後1ヶ月前後で死亡した症例では軸索、次いで髄鞘の崩壊を認めた。3ヶ月頃から脂肪顆粒細胞の浸潤とグリオーゼが始まり、症状の進行が停止して長時間経った症例では、瘢痕としてのグリオーゼがみられた。

視神経、下肢の末梢神経にも同様の病変がみられた。脊髄神経節及び腰髄前角の神経細胞の変性も認められた。オリブ核肥大を認めた症例が多かったが、小脳や大脳には著変をみなかった。

生前の臨床記録を調査し得た28例は、神経症状発現前平均25日間、平均28 mg/kg/dayのキノホルムを投薬されて発症し、発症後も、投薬が続けられていた。発症に要する最少総用量は200mg/kgであり、キノホルムの総用量と脊髄病変の強さとの間にはdose-response relationship が認められた。キノホルム投与終了後2ヶ月以上経過した症例では崩壊途上にある神経線維を認めなかった。

1965年から1970年9月の間に剖検された2744例の非スモン症例の調査では、152例が生前キノホルムを服用していた。152例中13例が、平均29 mg/kg/day、24日間同薬服用後スモ

ン同様の神経症状を発現していたが、脊髄、末梢神経の組織学的検索は出来なかった。キノホルム非服用例にスモンは発生していなかった。

以上からスモンは長索ニューロンの dying-back neuropathy を特徴とする疾患で、その原因はキノホルムによる亜急性乃至慢性中毒であると結論した。

論文審査の結果の要旨

本研究は 1964 ～ 1975 年の間に岡山県下に発生した SMON の 30 剖検例について臨床経過及び病理解剖所見を詳細に検討し、SMON の原因がキノホルムであろうと推論したものである。現在 SMON の原因としてキノホルム説が有力ではあるが尚意見の一致を見ていない。本研究はすぐれた特殊染色技法を応用してキノホルム説を裏づける重要な知見を得ており、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。